山口一郎著

『近代中国対日観の研究』

アジア経済研究所，1970年，235ページ。

わたくしは，研究を業としている者ではなく，アジアから日本に留学している学生の仕事にたずさわっていて，かれらの身近かにいる者の1人にすぎない。したがって「学術研究誌上に適した書評」などとうてい書くことはできない。本誌から送られて来た「書評執筆にあたってのお願い」には，たとえば，「著者，著書の当該分野における位置づけ等」をも紹介するように定められているが，わたくしにはその能力もなければ，そのために労力を費やすこともできない。

しかし，本書についての評が，わたくしのような門外漢に求められたのも，それなりのわけがあるのかも知れないと思い，お引きうけしたことを最初にお断わりしておきたい。

I

本書は，1920年代後半から1965年頃までの中国の対日観を，多数の中国人の書物・発言を広く紹介しつつ，それをいくつかに分類して解説している。そして1945年の日本敗戦を境に，第1部戦前期と第2部戦後期に分けてある。

第1部（5章）では，序章，対日観の史的回顧において近代以前の中国の対日観を鈴木俊，石原道博らの著作から要領よくまとめたあと，対日観を，官僚層・文人の対日観，中国国民党の対日観，中国共産党の対日観の三つに分類し，それぞれを代表する人物を登場させて，各章で系統的に扱っている。そして，第5章，抗日戦期における中国の日本帝国主義観では，最も多くの紙数を使って，東方会議(1927年）後の「田中上奏文」，拓務省会議(1930年)そして満州事変とつき進む日本の中国侵略政策，それと対決する中国の対日観・対日分析をいきいきとあとづけている。この部分が，本書の最も中心的部分と考えられる。

日本の侵略拡大の中で，中国の対日分析は日本の内幕にもするどく肉薄し，田中上奏文，拓務省会議の会議録はいち早く翻訳流布され，つづく「天羽声明」，「広田三原則」，「多田小冊子」，「松室情報」もつぎつぎとあばかれていき，さらに日本首脳内の急進派と穏健派の関係，日本ファシズムへの批判，そして日支提携論，東亜新秩序理念の正体を，実にみごとにつきとめていく中国側の分析が，著者によってうきぼりにされている。日本の侵略拡大によって裏切られるなかから，国民党も含めた広汎な抗日統一戦線の基礎となる対日観に収斂されていくのである。そして，史実も示すごとき日本の敗戦は，この収斂の中に中国によってはっきりと見通されるのである。第5章が，わたくしを迫力をもってひきつけたのは，この章が他章に比べて対日観に対応する日本側の姿についての言及が多いためではないかと思った。他の章は，どちらかといえば中国側の論調だけの一方口で，そこに単調さを感じ，立体感に乏しかった。

第2部の戦後期は2章にわかれ，戦後中国の民主化要求と民主化批判，および中華人民共和国後の対日観となっている。前者では，中国侵略者日本への徹底した民主化要求を紹介し，ついで不徹底な日本民主化への批判を天皇制，政党，財閥と土地改革について述べている。日本敗戦直後は，国民党と共産党の対日民主化要求はほとんど同じとし，その後，両者の間に差異が生まれたとされているが，その経緯はほとんど分析されておらず，後述のような意味からもわたくしは残念に思った。

最後の章での中国の対日観は中華人民共和国のそれを扱っており，アメリカが日本と西独を基地とする世界制覇戦略をとっていくなかで，日本の反動化が進み，朝鮮戦争によって決定的となり，日米安保条約によってそれが体系化されていった過程へのきびしい論調が紹介されている。この章では，台湾に逃れた国民党の対日観，あるいはそのもとにある台湾民衆の対日観への関心は，この地域と戦後日本が深い関係をもってきたにもかかわらず，なぜかしらその対象からはずされている。

以上が本書の内容のあらましである。

II

わたくしは在日アジア人留学生の身近かに生活しているものとして，本書の出版を心から喜んでいる。わたくしが日々接するアジア人留学生との会話は，“アジア人の声”の少なくとも一部を聞くことになるのである。その“声”を聞けば，必ず，わたくしは，自己の生い立ちを，自己の受けた教育を，そして日本の過去100年のアジアとの歴史を，ふりかえることを迫られていることに気づくのである。そして，その手がかりとなるものを書店の書架に求めたくなることも間々ある。しかし，いろいろ活字

を追ってみても，多くは徒労に帰すのである。“アジアからの視線”をまともに意識しようとする発想は，日本にはないのかも知れないと思うことも多い。本書は，だが，わたくしのこの渇きをいやしてくれた一つである。

この書を生み出したものが何であるかということは，わたくしの大きな関心の一つであった。著者は序文で，いみじくも次のように述べている。「“遅れた”国々の声に照らして自己の存在をふりかえり，自国の進路を考える発想が，日本には，これまで欠如していたし，いまも欠如しているように思う。むろん，“進んだ”国である西欧諸国やアメリカに目をそそぐことも必要であるが，将来の日本にとって，むしろ，より重大な意味をもつことになるのは，これら“遅れた”国々の声であり，“遅れた”と思われることのなかから，“進んだ”ものを読みとることでないかと思われる。“遅れて”いる国が，“遅れて”いることによって，“進んだ”ものをもちうることは，たとえば，かつての“遅れた”国である中国の日本批判が，今日からみて適確に鋭く日本の本質をつくものをもっていた，とわたしには思われることのなかにもしめされているといえよう。」

この著者の問題意識こそが，本書を生みだしたものとわたくしは考え，めったには手にしたくもない学術書に目を通すこととなったのである。著者は，したがって，危急存亡の秋(とき)にたたされた中国が，侵略者日本への分析を迫られ，そこに生み出される対日観の中にこそ，正確な真の分析，認識があると信じ，そしてそれらを全面的に受け入れることによって，始めて今まで日本人に見捨てられていた多くの著作に眼を通し，本書が生まれることとなったのであろう。わたくしが日々の仕事の中で本書を必要としたのは，再び“アジアと日本”の対面の秋(とき)を迎えていると，ひしひし感じているからである。

最近“日本軍国主義復活せり”の声がとりわけアジアから彭湃と起っている。先日東南アジアの紙面にのったいくつかの対日論評を留学生からみせてもらった。8・15の日本政府主催の「戦没者追悼式」の直後，ある一般紙はこの追悼式をテーマに社説をかかげていた。いわく「日本の保守勢力は，一貫して『敗戦』という事実を認めようとせず，『終戦』と称してきた。別のいい方をすれば，戦争はしばらく『中止』したのであって，条件さえできればいつでも『続け』られるということである。……追悼式では天皇の式辞があり，各界から献花が行なわれ，オーケストラはベートーベンの『英雄交響曲』第2楽唱を演奏した。わが国土を蹂躙し，わが人民を殺戮したあの殺し屋どもは，『英雄』として賞讃された。われわれは，警戒しなければならない時を迎えたようだ。」と。

また，もう一つの一般紙は，日本の伝統的外交政策を論評して次のようにのべている。すなわち「日本の過去百年の歴史には，二つの有名な理論がある。一つは『脱亜論』と呼び，もう一つは『アジア主義』と呼ばれている。表面的にみれば，この二つは水と油で相容れないようにみえるが，実際には，一つがいの仲睦まじい小鳥なのである。そして，日本の国力が弱い時は前者の顔を，国力がついて来ると後者の顔をきまってあらわすのである。……日米の新政策（昨年の日米共同声明を指す――田中注）に合わせて，日本の国内には，『アジアへの関心』，『アジアへの援助』あるいは『アジア研究』の言論や文章が大量に現われるようになった。そして，従来陽のあたらなかった『アジア』に関する刊行物や書籍がにわかに売れるようになった。久しく途絶えていた『アジアは一つ』とか『アジア主義』の理論が，いつの頃からかまたまた登場してきた。」と。

このような声に接しているわたくしにとっては，三島由紀夫割腹事件も，決して“突然の狂気の沙汰”とは思えない。本書が伝えている中国の声は，ここに引用した現在の“アジアの声”と酷似してはいないだろうか。しかし，この“アジアの声”は今また全くわれわれに知らされないようにできている。いくら多くの特派員がアジアに派遣されていようとも，企業活動のためいくら多くの会社員がアジアに駐在しようとも，いくら多くの大使館や領事館が各地にもうけられようとも，またいくら多くの学者・研究者が調査旅行に出かけていこうとも，決してこれら“アジアの声”はわたくしたちに伝わって来ないのである。それに耳をかたむけようとする姿勢がないのではなかろうか。“聞こえれども，聞かず”であったとしたら，本書が提起した“警告”は，きわめて現代的意味をもつことになろう。こういう意味において，わたくしは著者の労に率直に敬意を表したい。

III

だが著者が“中国の声”に照らして自己の存在をふりかえることに意義をみいだしたことには，もう一つの側面があるように思う。それは中国の対日観がそうであったように，自己が直面する課題に真剣にたちむかうことの中にのみ，認識の正確さすなわち普遍性があるという点である。そして，これを是認することは，当然自己に

とってもそこに立脚することを迫られるのである。すなわち，わたくしたち日本人にとっては，なにゆえに現在中国の対日観を扱わねばならないのかということになろう。この角度から本書をみてみると，わたくしにはいくつかの問題が感じられた。中国の対日観の研究は，わたくしには日中問題が現実的な課題としてまず意識されてくる（それは，当然「アジアと日本」の問題へのひろがりをもっているが）。

日中問題はいろいろな角度から考えられるが，一つは日本と中国との過去をどうとらえかえしたうえで，現在どうするかということである。そのなかで，一般に忘れられているのは，“台湾”の問題である。中国即中国大陸という発想があまりに流布されてはいないだろうか。そして，「台湾植民地支配五十年」が欠落したところで中国研究が進められ，その延長線上で日中問題が語られてはいないだろうか。

本書が「近代中国の対日観」を扱いながら，日本の植民地支配下にあった台湾の声を，全く扱っていないことに大きな疑問を感じた。1895年の日本軍占領への全島的反乱から始まって，植民地支配の中で1907年の北埔事件を皮切りに，林圯埔事件，土庫事件，羅福星革命といわれる苗栗事件，新庄事件，余清芳革命といわれる西来庵事件など多数の武装蜂起が記録されている。また台湾文化協会による6・3法撤廃運動，台湾議会設置請願運動，台湾民衆党，台湾共産党，さらには台湾工友総連盟台湾農民組合などもある。これらの日本の植民地支配をじかにうけた台湾でいかなる対日観が形成されたかの指摘が全くないことを残念に思う。

わたくしが同じ仕事のうえで，かなり早い時期に手にして動かされた本に，実藤恵秀著『中国人日本留学史』(1960年)がある。この本も，きわめて貴重な労作であるが，この「中国人」の中には台湾からの留学生のことは全くでてこないのである。大陸からの留学生については留学生活の素顔から日本への反抗までよく調べられていても，台湾からの留学生には，一言半句ふれられていないのである。台湾総督府の監視のもとでいかなる生活を送り，日本からの解放のためにいかなる活動を行なったか（台湾文化協会，台湾議会設置請願運動などには多くの留学生が参加している）なども，全く述べられていないのである。

本書に台湾からの声が忘れられていることは，次のような点にも影響しているように思われる。「日本が台湾を植民地支配していること」に関する中国の対日観あるいは対日発言がほとんど紹介されていない点である。台湾の苦しみは，おそらく大陸の人に“体の痛み”とうけとられているにちがいない。少なくとも，台湾の解放運動に参加した人は，大陸に同志を訪ねている記録がある。本書は21カ条要求（1915年）あたりから始められているが，わたくしは，むしろ1895年の日本の台湾支配時に，対日観にどういう変化がおきたかをまず知りたかった。

対日観研究における台湾欠落の問題は，戦後期においては台湾に逃れた国民党の対日観の系譜がほとんどつかめない結果を生んでいる。第5章の抗日戦期には共産党と多くの共通点をもっていた国民党が，なぜ，どのように変ったのか，あるいはその対日観ははたして本当に変ってしまったのか，という視点は，今日の日中問題にとってほとんど鍵の位置をしめるともいえるのではなかろうか。本書で紹介されているように，国民党創始者孫文の対日観は，当初，明治維新に注目し，日本にならって中国の“維新”をはかろうとするところから出発している。しかしその孫文は死の前年，神戸で「西洋覇道の手先となるか，あるいは東洋王道の干城となるか」と日本に問うているのである。

国連総会において，アメリカは中国代表権問題に行きづまりを感じつつ，ついに「一つの中国，一つの台湾」をほのめかすにいたったのである。台湾を中国から切り離した最も重要な時期は，日本の50年に及ぶ植民地支配ではなかったろうか。そして今，日本の「中国」研究の中から「台湾」が全く欠けているという形で，これを追認しているとしたら，それは日中問題に“二重の誤ち”を犯すことにならないだろうか。「日本と台湾との特殊な関係」という煙幕は，あまりにも広く，濃くはられているようだ。

IV

1970年の「8・15記念国民集会」で，ある台湾からの老人は，かつての日本植民兵の体験を語りつつ，会場からの自由発言で次のように語った。

「台湾の状態を，みなさんにちょっと訴えたい。じつは新しい日中戦争は始っているのです。台湾には，現在450の日本企業が，クモのようにガッチリ巣をはって台湾人の血を吸っているんです。三井，三菱，住友みたいな財閥もいるし，中小企業までも台湾の経済を搾取している。いま，中共が台湾を解放するならば，日本人が台湾にある膨大な権益を放棄できますか。会場のみなさんだって，おそらく放棄できないだろう。放棄してもいいと

いった場合，非国民といわれるかもしれない。」

この声は，韓国からも聞こえてきそうだし，いや東南アジア全域からすでに聞こえているといえるかも知れない。わたくしたちは，かつての「満州生命線論」に代わって「マラッカ海峡生命線論」という“枠組”をすでにもっている。69年秋，自衛隊の“軍艦”が東南アジアを一周したことは，アジアでは特別な意味をもってうけとられている。

69年の「日米共同声明」において，「台湾の安全は日本の安全にとって重要である」と述べられていることの意味を避けて通ることはできまい。あるアジア留学生はこういうコメントをつけた。ソ連がかりに「北海道の安全はわが国の安全にとって重要である」とある外国政府との共同声明で言及したとしたら，その時日本人は，ソ連はどんなことを考えている国だと思うでしょうか。ここには，ある一線をこえた日本の姿が，今アジアで語られていることが示されている。

69年3月，国会に「出入国管理法案」が提出されたが，これには立場を超えた一致した在日外国人の激しい反対運動があった。朝鮮民主主義人民共和国，中華人民共和国を支持する人々のみならず，大韓民国，中華民国を支持する人々も，入管法についてはいずれもはっきり反対の意志表示を行なった。そして韓国青年，中国青年はハンストにまで訴えたのである。

わたくしは本書を読み進みながら，これらの事実ないし情況が脳裡から離れなかった。これらの声は，いずれもアジアの非社会主義国からのそれなのである。しかも現在の日本は，この地域と最も深い政治・経済的関係をもっている。こう考えてくると，わたくしは本書の第2部が，ほとんど中国共産党の系譜のみにおいて対日観がとらえられていることに疑問をもつのである。蔣介石の「怨みに報ゆるに徳をもってする」という8月15日の演説は，一方では今なお日中関係に大きな影を落としているといえよう。しかし本書では，対日観の研究の中での正しい位置づけがなされないままに終っている。そして，すでに前述の老人のような声が，台湾から出ているのである。70年6月の毎日新聞には，国民政府が台北空港にある「日本勧業銀行」の野立て看板から，「日本」の2字を削れという要求をしたことが報じられている。勧銀の頭取は日華協力委のメンバーであって，台湾との関係も深く，そのため太陽銀行を除く都市銀行の中でただ勧銀だけが中国大陸からコルレス契約を拒否されているほどである。その勧銀が「日本」の2字を削れという要求を受けているのである。戦後緊密な関係を保ってきた日台間には，50年の植民地支配のうえに，今進行している経済進出も重なって，きわめて屈折した対日観がひめられているはずである。そのヒダに光をあてることは，対日観研究の一つの視点であろう。そしてその研究は，そのまま，東南アジアの対日観研究への条件を作ることになろう。なぜなら，現在の東南アジアは，一方では日本からの援助をうけ，日本から資本を導入しつつ，一方では1日たりとも日本を信頼して日を送ることはできないであろうから。しかし，「近代中国の日本観」が，わたくしたちの過去に光をあててくれたと同じ意味において，東南アジアの対日観は70年代の日本を映しだし始めているようだ。圧迫を加えている者の真の姿は，その圧迫を受けている者が最も正確に見通すことができるのではなかろうか。

わたくしは，自己のおかれている“緊張関係”からのみ，あまり多くを著者にむけてしまったかも知れない。しかし，その真意は理解してもらえるものと信じて，小論を結びたい。

（〈財〉アジア学生文化協会　田中　宏）